

東京大学 大学院医学系研究科・医学部
医学のダイバーシティ教育研究センター

年 報

2023 年度

*Center for Diversity in Medical Education and Research,
Graduate School of Medicine and Faculty of Medicine, The University of Tokyo*

目次

目次	2
● 年報によせまして：笠井清登	4
● センター概要	5
● センター関係者一覧(2023. 4-2024. 3)	6
【教育事業】	7
■ 教育部門	7
医学の D&I 人材育成プログラム	7
(概要)	
(2023 年度活動状況)	
(今後の展開)	
講義	10
医学部必修科目「医療・医学領域におけるダイバーシティ&インクルージョンとコ・プロダクション」新規開講に向けて	
M4 臨床統合講義	
その他の講義 (「Medical Biology 入門講義」「神経科学入門」「M2 系統講義」「精神保健学実習」)	
その他	11
附属病院スタッフへの啓発活動	
東京大学医学部教育総合的改革 FD	
ピア人材育成事業	11
■ 支援部門	12
学生・職員支援	12
新設：ダイバーシティ支援窓口 (医学のダイバーシティ教育研究センターにて)	
附属病院産業医面談 (職員等健康相談室にて)	
医学部学生相談 (医学部学生支援室にて)	
保健センターにおける相談・診療	
ピアサポートワーカー支援	

【研究事業】	14
■ 研究部門	14
日本の医学部における障害のある学生の実態調査に向けて	14
新規開始：「看護学生・医学生の困りごと・ニーズ調査」	14
学会参加	15
■ 実践部門	16
障害のある構成員を対象としたインタビュー動画プラットフォームの構築と事例集・ガイドラインの作成	16
【業績一覧】	17
英文原著	17
英文総説	19
和文原著	19
和文総説	20
和文報告書	20
和文記事	20
書籍	20
学会発表	20

● 年報に寄せまして: 笠井清登

身体や精神に疾患や障害のある人にとって臨床実習や研修のバリアは大きく、本当は医師になりたかったのに諦める人が多く、国際的に問題となっています。米国調査では、医学生約 3%に障害があり、テクニカル・スタンダードにおける合理的配慮を 1/3 程度の大学で進めていますが、国内では、差別解消法以降、増加傾向にある障害のある医学生が、研修医になってから合理的配慮が提供されずバーンアウトしています。本学では、患者の体験を持つ医療従事者であるピアサポートワーカーを附属病院に配置し、先端研では、患者の経験をもち、かつ研究者である「ユーザーリサーチャー」を育成するなど、国内の大学構成員のダイバーシティ変革を先導してきました。

これらの実績から、医学系研究科とバリアフリー支援室の密接な連携により、全国医学部初の障害のある医学生等の育成プログラムを提供する当センターを 2021 年 4 月より設立し、医学部教育課程にダイバーシティとインクルージョンの理念を取り入れるべく活動してまいりました。

3 年目となる 2023 年度は、2022 年度に立ち上げた、医学部教育課程にダイバーシティとインクルージョンの理念を取り入れる「医学の D&I 人材育成プログラム」をさらに発展させ、学生と教員の共著論文を日本医学教育学会の学会誌に発表することができました。また、学生が主導した調査研究も進めています。2024 年度からは、医学部 2 年生の必修科目「医療・医学領域におけるダイバーシティ&インクルージョンとコ・プロダクション」の新規開講が決まりましたので、医学におけるダイバーシティ&インクルージョンの早期教育のモデルを作っていきたいと思います。支援としては、医学部学生支援室との密接な連携のもと、医学部に「ダイバーシティ支援窓口」を設置し、活動を開始しました。2024 年度からは、全学に多様性包摂共創センター (IncluDE) が設立されましたので、密接な連携のもと、医学部・医学系研究科および附属病院における D&I の普及と実装をさらに推進してまいります。今後の活動のさらなる発展に向けて、ご指導のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

● センター概要

○ 教育事業

■ 教育部門

- 医学のダイバーシティとインクルージョンについての教育を行い、医療の研究・開発における患者・市民参画(Patient and Public Involvement: PPI)の意義を理解し、研究と医療実践における共同創造(Co-production)の素養をもつ医師・医学研究者・医療人材を育成することを目指して、既存の医学部講義・実習等(フリークォーター、臨床研究者育成プログラムなど)への参画を進めた。また、これらの取り組みをより統合的・系統的に行うために、2022年度より「医学のダイバーシティ&インクルージョン人材育成プログラム」を創設し、共同創造の理念にもとづいて参加学生も主導となりながら学びを深めていく仕組みづくりを行い、学術理論にふれるだけでなく、各実践現場への見学・参加の機会を創出してきた。

■ 支援部門

- バリアフリーやダイバーシティ支援の必要な医学部学生に対して、バリアフリー支援室、相談支援研究開発センター、医学部学生支援室との密接な連携により支援を行ってきた。また、医学部学生支援室を利用している学生とスタッフ、チューター等に対して、ダイバーシティの観点からの連携、助言を行ってきた。これらの活動を礎に、医学のダイバーシティ教育研究センターでは、「ダイバーシティ支援窓口」を新設した。この窓口では、医学系研究科・医学部における、障害、ジェンダーなどにともなって学業・研究等に困難を抱える学生からの相談・支援に対応する。

○ 研究事業

■ 研究部門

- 医学・医療分野におけるダイバーシティとインクルージョンを推進していくための研究活動として、医学教育・医療の現場における障害のある人材の存在率や合理的配慮などについての実態調査について準備している。さらに、「医学のダイバーシティ&インクルージョン人材育成プログラム」の参加学生の発案により、「看護学生・医学生の困りごと・ニーズ調査」を行った。

■ 実践部門

- 障害のある構成員を対象としたインタビュー動画プラットフォームの構築と事例集・ガイドラインの作成にむけて

● センター関係者一覧(2023.4-2024.3)

室員、アドバイザー

- センター長 笠井清登教授
- 副センター長 里村嘉弘准教授
- センター員 宮本有紀准教授
(医学系研究科精神看護学分野)
金原明子助教
(附属病院精神神経科)
- 学内アドバイザー 熊谷晋一郎准教授
(本部バリアフリー支援室)
大島紀人講師
(相談支援研究開発センター)

運営委員会

- 委員長 笠井清登 センター長
- 委員 廣瀬謙造教授
(医学部教務委員長)
江頭正人教授
(医学教育国際研究センター医学教育学部門)
熊谷晋一郎准教授
(本部バリアフリー支援室)
宮本有紀准教授
(医学系研究科精神看護学分野)
里村嘉弘 副センター長

【教育事業】

■ 教育部門

医学の D&I 人材育成プログラム

(概要)

2022 年度に開始した「医学のダイバーシティ&インクルージョン人材育成プログラム」は、2 年目を終えました。このプログラムは、医学科と健康総合科学科の学生を対象に、月に 1 度開催をしています。初年度はダイバーシティやインクルージョンに関連した領域の講師をお招きし、講義を聴講する形式で進められました。また、学生の自発的な声から「医学部にインクルージョンの場は存在するのか?」をテーマにした学び合いの会も実施されました。2023 年度はアクティブラーニングの形式でプログラムを開催しました。年度初めに実施した学生と教職員の共同ブレインストーミングを通じて、探究したいテーマについての意見交換を行い、本年度は、学生の関心があるテーマに関する発表やグループディスカッション、医学生・看護学生の困りごとやニーズに関する調査の企画立案からアンケート調査までを実施することとなりました。プログラム以外の時間にオンラインミーティングで集まり、ニーズ調査項目を検討するなど、学生主体での取り組みが進みました。また、プログラム参加者からあがった声を発端に、心理的安全性を重視した職場作りや多様性を尊重する誰もが活躍する地域作りに取り組む施設を訪問する 2 泊 3 日のスケジュールでの徳島県および愛媛県での課外学習も行いました。

(2023 年度活動状況)

2023 年度は、医学科 19 名、健康総合化学 8 名の学生が参加登録し、見学・フィールドワークから調査・研究に至るまで、学生と教職員が共同でプログラムを創り上げていく実践に取り組みました。

◇2023 年 4 月 28 日(第 1 回)

オリエンテーション および「D&I についての関心事、学びたいこと」のグループワーク

当センターと医学の D&I 人材育成プログラムについての紹介、グラウンドルールの設定の後、参加者の自己紹介と、医学・医療領域における障害領域を中心とした D&I についての関心事についてグループディスカッションを実施しました。この初回セッションで、医学部、医療領域の D&I に関連したことがらについての問題意識の共有も進み、参加者の関心の高さが明らかになりました。

◇2023年5月19日(第2回)

ディスカッション「本プログラムで明らかにしたいこと・調査していきたいこと・発信したいこと」

2023年度の年間を通して、このプログラムおよび当センターで取り組みたい内容についてのアイデア出しを行いました。ポストイットを使用して行われたセッションでは、「病院デザイン」「助けてが言いやすい場づくり」などの環境改善への関心や、「学生目線の教材づくり」などの普及・発信に関する提案、障害のある医療者や学生の現状調査などのニーズ把握に関するアイデアが多数あがり、短時間の中で、学生と教職員が共に積極的にセッションに取り組む姿が見られました。

◇2023年6月16日(第3回)

ディスカッション「年間を通じて取り組みたいテーマ」①

5月のアイデア出しを基に、年間を通して取り組みたいテーマをさらに深掘りするディスカッションを実施しました。参加者の関心あるテーマについて調査・分析を進め、最終的には学会発表や大学関係者への提言などを目指し、調査や分析の結果を実際の医学部や医療現場に活用できるというなどの意見があがりました。

◇2023年7月21日(第4回)

ディスカッション「年間を通じて取り組みたいテーマ」②

6月に引き続き、年間を通じて取り組みたいテーマを掘り下げるディスカッションを実施しました。医学のD&Iの学びを深めるため訪問してみたい場所について興味が高まり、それに関連する話題が展開されました。また、今後、調査の取り組みとして、医学部看護学生・医学生の困りごとやニーズに関する調査を進める方向で合意が形成されました。

◇2023年9月15日(第5回)

学生による発表・話題提供「外国人の医療アクセス」「海外研修報告」

プログラム参加者(医学科学生)から、外国人の医療アクセスについてと、この夏に参加した海外研修についての発表がありました。発表後、質疑応答や感想の共有の時間を持ち、参加者それぞれが今後どのようなことに意識し取り組んでいくべきかを考える貴重な機会となりました。

◇2023年10月20日(第6回)

今年度テーマ取り組み「看護学生・医学生の困りごと・ニーズ調査」①

看護学生および医学生の困りごとやニーズに関する調査についてのディスカッションを開始しました。アンケート調査を行う方向で、回答する立場を想像した学生からの意見や、研究を進めていく上での教員から意見を活発に出し合いながら、目的や対象者、質問項目などをひとつひとつ丁寧に、検討を進める姿が見られました。

◇2023年11月10日(第7回)

今年度テーマ取り組み「看護学生・医学生の困りごと・ニーズ調査」②

前回に引き続き、看護学生および医学生の困りごとやニーズに関するアンケート調査についてのディスカッションを行いました。この回の後、プログラム以外の時間にオンラインミーティングで集合して質問項目を検討する機会を持つなど、学生主体での取り組みが進みました。

◇2023年12月14・15・16日(第8回)

(課外学習)「だれもが活躍する職場づくり・まちづくり見学」

心理的安全性を重視した職場作りや多様性を尊重する誰もが活躍する地域作りに取り組む施設を訪問する2泊3日のスケジュールでの課外学習として、徳島県徳島市のむつみホスピタルおよび、愛媛県愛南町の公益財団法人正光会とその関連NPO法人を訪問しました。課外学習の参加学生からは、「ダイバーシティとインクルージョンに配慮した文化の育成、直面する課題、具体的な実践について、実際に現地を訪れ直接、お話を伺えたからこそ知り得たことが多くあった」、「ダイバーシティやインクルージョンに正解はなく試行を重ね志向し続けるものであることを改めて感じた」などの感想が得られました。

◇2024年1月19日(第9回)

課外学習の振り返り

12月の課外学習に参加した学生と教職員が中心となり、徳島・愛媛への課外学習の振り返りを行いました。訪問先でうかがった話の共有や、それぞれが感じたことを発表し合い、訪問先での取り組みを、私たちはどう活かしていったらよいかについてなど議論を深めました。

◇2024年2月9日(第10回)

ディスカッション「2024年度D&Iプログラムについて」「学会誌『医学教育』への論文投稿について」

来年度のD&Iプログラムをどのようなものにしていきたいか、2023年度の内容を振り返り、本プログラムの更なるブラッシュアップを目指した話し合いの機会を持ちました。募集に関する意見から、学生の参加しやすい枠組み、取り組んでみたいことなど、多岐にわたり様々なアイデアが出されました。

◇2024年3月8日(第11回)

「看護学生・医学生の困りごと・ニーズ調査について」および2024年度「学会誌『医学教育』への論文投稿について」

困りごと・ニーズ調査のアンケート項目を公開する前の最終段階の検討と、来年度の本プログラム募集やプログラム改善のためのディスカッションを実施しました。来年度に向けて本プログラムをより発展させていくべく、参加者それぞれが、自由に、活発に、ディスカッションに参加する姿が見られました。

(今後の展開)

来年度も引き続き、学生の関心あるテーマについて自由に意見を交換しながら、ダイバーシティとインクルージョンについての理解と知識を深め、自らの取り組みにつなげていく機会を提供することを目指していきます。

講義

医学部必修科目「医療・医学領域におけるダイバーシティ&インクルージョンとコ・プロダクション」新規開講に向けて

多様な背景に配慮できる医療人材の育成、および、医学・医療領域におけるインクルーシブな文化・システムの醸成に向けて、ダイバーシティ&インクルージョンとコ・プロダクションについての早期の教育機会が必要です。そのため、東京大学医学部では、ダイバーシティ&インクルージョンとコ・プロダクションの理念とその医学領域・医療システムにおける具体的な実践について多角的な視点から理解を深め、また、実装にむけた考察を主体的に行うことができることを目標として定め、学部2年生(M0)時の必修科目として、2024年度から新規開講されることとなりました。

10~12月に計9回のシリーズで、講義/少人数型演習を組み合わせで行う予定です。アクティブラーニングの手法を取り入れながら、障害の社会モデル、共同創造(Co-production)、当事者研究、ユーザーリサーチ、アンティスティグマ、患者市民参画(Patient and Public Involvement: PPI)、学校保健、ピアサポートワーカー、トラウマインフォームドケア、健康の社会的決定要因(Social determinants of health: SDH)、ジェンダー、STEM+M領域のラボ・研究におけるダイバーシティとインクルージョンといったテーマについて学びます。

M4 臨床統合講義

本学医学部6年生(M4)対象の「臨床統合講義」では、「誰ひとり取り残さない医療を目指して」と題し、健康の社会的決定要因を軸に多様な部門・職種のスタッフが、年代や領域を横断した架空事例に基づき、見立てや支援について講義やロールプレイを行いました。健康の社会的決定要因について里村から、多様なライフコースにおける、子供と家庭について小川知子(子ども・AYA世代と家族こころのケアセンター/こころの発達診療部)から、思春期・青年期について矢島明佳(リハビリテーション部 精神科デイホスピタル)から、産業保健領域について川上慎太郎(職員等健康相談室/精神神経科)から講義を行い、患者の社会的困難に気づき、支援するための診察場面のロールプレイを里村・金原で行いました。2022年度の学生からの感想をもとに、講義内容をアップデートし、学生からは「病態だけを見る治療より多方面にベネフィットをもたらすことができるということに共感しました。」という感想があった一方で、「そもそも病院に来られないような方々に、どのように向き合っていけばよいのだろうか、と思いました。」という意見もありました。

その他の講義

(「Medical Biology 入門講義」「神経科学入門」「M2 系統講義」「精神保健学実習」)

教養学部 全科類対象とした全学自由研究ゼミナール「Medical Biology 入門コース」における一コマと、大学院・医学共通講義「神経科学入門(精神疾患の神経科学)」、「M2 系統講義」(精神神経科)における一コマのうちの一部の時間にて、医療人材におけるダイバーシティ&インクルージョンについての講義を行いました。学生からは、ダイバーシティ&インクルージョンの組織への浸透における、マジョリティへの説得方法について意見が出ました。

また、医学部健康総合科学科3年生への精神保健学実習「地域精神保健実践活動の現状と課題」で、佐々木より、ピアスタッフとしての活動や視点を含めた精神保健サービスの現状と課題を講義しました。精神医療における課題に対してピアサポートワーカーがもたらすことについて、新たな視点が得られたという感想が多くありました。

その他

附属病院スタッフへの啓発活動

医学部附属病院精神神経科において、スタッフを対象として、医療・医学におけるダイバーシティ&インクルージョンの現状や意義、研究領域における患者市民参画(PPI: Patient and Public Involvement)のニーズの高まり、研究の展望等について発表させていただき、精神医療を含めた現場において、医療人材における医療・医学におけるダイバーシティ&インクルージョンを進めていく上での課題等について、議論を行いました。

東京大学医学部教育総合的改革 FD

医学教育国際研究センター医学教育学部門、医学部学生支援室で共同開催されていた東京大学医学部教育総合的改革FDにおいて、2023年度からは医学のダイバーシティ教育研究センターも参画させていただきました。FDでは、チューター教員の活動、健康総合科学科での学生支援などのご発表に加え、当センターからは障害のある医学生の学生支援についてお話ししました。グループワークでは、医学部における学生への支援や配慮の考え方について各教員間で活発に意見交換を行いました。

ピア人材育成事業

本センターでは、「疾患の経験をもち、その体験を生かして医療の担い手となるスタッフを育成・支援すること」を目的の1つとし、副センター長・里村嘉弘、センター員・金原明子を中心に、センター員・宮本有紀准教授（医学系研究科精神看護学分野）、学内アドバイザー・熊谷晋一郎准教授（本部バリアフリー支援室）よりご助言をいただき、学生の意見を取り入れながら、ピアサポートワーカー育成プログラムを実施しています。少人数制で、期間は1年で、合計120時間履修することで、東京大学の履修証明書を発行しています。講義として、ピアサポートやリカバリーの理念や哲学に触れることを基盤とする対話を軸にした講座（講座例：リカバリーとは、ピアサポートとは、自身のリカバリーの体験や困難の開示の仕方、リカバリーストーリー、リカバリー志向の言葉遣い、自身のセルフマネジメントについてなど）および精神医学入門講義（医療現場でのコミュニケーション・ロールプレイ、精神保健福祉法と退院支援、リハビリテーション、精神療法入門、薬物療法入門など）を行っています。また、デイホスピタル・リカバリーセンター・病棟における多職種協働実習を行っています。これらの実習においては、シニアピアサポートワーカーからスーパービジョンを受けるとともに多職種での振返りを行っています。本教育プログラムやピアサポートワークの実際について、冊子を作成し、インターネット公開を行い、紙冊子としても医療・福祉・行政・教育機関や個人に対して、配布しました。

https://co-production-training.net/wp/wp-content/themes/co-production-training1.1/pdf/psw2203_0302_tachi.pdf

2023年度は、「ピアサポートワーカーの現在地 その後(仮)」を企画し、修了生による座談会を行うなどして、発行に向けて準備しております。今後は、人材育成の紹介・浸透を目指し、研修プログラムについて、学会発表・論文執筆をしていきます。ご支援・ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

■ 支援部門

学生・職員支援

新設：ダイバーシティ支援窓口（医学のダイバーシティ教育研究センターにて）

医学のダイバーシティ教育研究センターでは、東京大学がダイバーシティ・インクルージョンの推進を図るなか、医学系研究科・医学部においても、障害、ジェンダーなどにもなって学業・研究等に困難を抱える学生からの相談・支援に対応するための「ダイバーシティ支援窓口」を設置しました。ダイバーシティ支援窓口は、学内の他の相談施設と連携を図りながら、医学部に特化した相談・支援や必要な環境調整を行います。学生との定期的な面談を行いながら、必要に応じて関係の先生方や部署、通院先がある場合は主治医と連携を取るなどしながら支援を進めます。

附属病院産業医面談（職員等健康相談室にて）

東京大学医学部附属病院に所属する構成員の心身の健康保持・増進の支援を目的として2019年に設置されました職員等健康相談室にて、笠井が室長を務めており、2022年度より、里村が精神科産業医（週半日の面談枠を設定）として着任し、健康管理・労務管理・危機管理等の総合的な支援を行っております。引き続き、不調や障害のある構成員の支援を行いながら、障害のある構成員が活躍できる職場の環境や合理的配慮の実現、障害のある学生が就労を迎えるにあたっての途切れない円滑な支援、男女共同参画やワークライフバランスを考慮した働き方の実現等、医学のダイバーシティ教育研究センターとしても重要な課題について、同室員という立場からも邁進して参ります。

医学部学生相談（医学部学生支援室にて）

医学部においては従来より、教員が学生をサポートするチューター制度という仕組みがあり、各教員が数名の学生の担当となって、定期的な面談等を通して通常の授業や実習ではカバーしきれないきめ細やかな教育・指導を行っています。その中でも、より重点的・継続的に相談・支援を行うことが必要な場合の相談窓口として、平成27年に本室が設置されました（平成26年より準備室）。本センターからは、笠井が室長、宮本が副室長、里村が室員として本室の活動に携わっており、本室専属の職員らとともに、学生本人を主体者として、抱えている問題について共に考え、意思決定や問題解決を支えることを心がけながら対応しております。また、同室においては、身体・心理面での不調や障害のある学生の支援を必要とすることもあり、学生本人のニーズをもとに、医学のダイバーシティ教育研究センターとの連携により、より包括的でシームレスな支援体制の構築を目指して参ります。

保健センターにおける相談・診療

本学相談支援研究開発センターでは大学構成員への相談支援業務を担っており、学内の相互扶助コミュニティの推進、個別相談、学部・大学院の授業による予防啓発教育、学内全部局での教職員向けFD・SD活動の展開、各種研修企画等の幅広い活動がなされております。里村は、相談支援研究開発センター・精神保健支援室の皆様とともに、保健センター精神科の非常勤スタッフとして、相談支援業務に月に1回従事させていただいております。医学のダイバーシティ教育研究センターの学内アドバイザーを務める相談支援研究開発センター・大島紀人先生にもご指導をいただきながら、多様な学問あるいは生活の場において生じる様々な苦悩に向き合い、各学部の現場からのご協力とご配慮をいただきながら支援を行っております。医学部の学生に関しては、ご本人のニーズに沿って、必要に応じて医学のダイバーシティ教育研究センター、医学部学生支援室、附属病院等、関連部署が円滑に連携し、より効果的な支援に繋げるための取り組みを行っております。

ピアサポートワーカー支援

東京大学医学部附属病院精神神経科では、2015年度よりピアサポートワーカー(自ら疾病・障害の経験をもち、医療・福祉サービスを利用した経験やそれらに基づく視点を活かして利用者の支援を行い、かつ、所属機関と雇用契約を結んで働く職員)の雇用を行っております。ピアサポートワーカーの活躍の場は徐々に広がってはきているものの、例えば精神科医療機関においてはピアサポートワーカーの所属歴がある施設は1割にも満たず、非常勤雇用など不安定な雇用が多く、職場環境の問題等も指摘されています。ピアサポートワーカーは多くの職場において、専門職に囲まれる中でマイノリティな存在です。また、高度の医療を提供する地域の中核的医療機関であり、教育・研究といった幅広い役割を担う大学病院では、さらにその傾向が顕著であると言えます。マイノリティであること以外にも、障害のある構成員が組織に参加するにあたっては、様々な構造的・文化的な障壁が存在すると言われております。

そのため、ピアサポートワーカーが現場で活躍し、より力を発揮していくためには、ピアサポートワーカーが実際に医療や教育に携わる中で抱える葛藤や苦悩について共有し、相談・対話を継続的に行っていくことが重要だと考えております。本センター員(里村、金原)らにより、勤務する病棟の医長等の現場スタッフを含めたもの、複数のピアサポートワーカーで参集するもの、個別面談など、複数の枠組みによる定期的な振り返りの会を設定しており、必要な配慮の相談に加え、さらなる活躍のために、組織において変革すべき構造や文化についても相談をおこなっております。2024年度は、附属病院精神神経科で1名、本センターで1名のピアサポートワーカーを新たに迎え、合計4名のピアサポートワーカーが勤務しています。

【研究事業】

■ 研究部門

日本の医学部における障害のある学生の実態調査に向けて

医学・医療分野において共同創造を推進していくためには、障害のある医療人材の活躍が必要不可欠であり、障害のある医療人材の活躍が期待されているものの、その参画は世界的に遅れているのが現状です。米国医科大学における障害のある学生の割合を調べた研究では、2016年は2.7%、2019年は4.6%と増加傾向にあるものの依然低く、英国でも、労働年齢における障害のある人の割合が19%であるのに対し、医学部学生は4.1%にとどまると報告されています。日本では、全国の大学に在籍するすべての学部を含む障害のある学生の割合が0.9-1.0%にとどまっており、医学部においては明らかではないものの、さらに存在率が低いことが想定されています。

本センターでは、現状の把握とより適切な合理的配慮の提供にむけて、全国の大学医学部における障害のある学生の存在率や配慮の実態、および所属組織の把握状況を調査したいと考えており、準備を進めており、簡便かつ海外の報告との比較可能な調査票の作成を行っております。関係各所におかれましては、今後ご指導を賜ることになるかと存じますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

新規開始 「看護学生・医学生の困りごと・ニーズ調査」

医学のダイバーシティ&インクルージョン人材育成プログラム参加学生の発案により、「看護学生・医学生の困りごと・ニーズ調査」を行いました。本調査は、看護学生・医学生の抱えている困りごとやニーズ、“ケア”に関する実態を明らかにすることを目的にしています。医学教育の中で当たり前になっている文化・慣習を問いなおすことで、医学教育現場が“ケア”に溢れたものとなり、そこから自他を豊かに“ケア”にできる医療者が多く育っていけると良いという学生の思いのもと、研究立案・研究倫理申請・アンケート項目の検討・アンケート協力の呼びかけを行いました。対象は、18歳以上、2016年度以降に看護師・医師の養成課程に進学した方（在学中の方、既に卒業された方、あるいは中退された方や休学中の方を含む）です。分析の結果を学会誌などで報告させていただきます。

学会参加

第 119 回日本精神神経学会(2023 年 6 月 22-24 日、横浜)

第 119 回日本精神神経学会のシンポジウム「課題解決型高度医療人材養成(精神領域)のこれから―産業保健との関連から―」において、本センターより「医学領域のダイバーシティとインクルージョンに向けて―医学のダイバーシティ教育研究センターの取り組み―」というテーマで発表しました。2018 年からの精神神経科におけるピアサポートワーカーの配置から、文部科学省・課題解決型高度医療人材養成プログラム「価値にもとづく支援者育成(TICPOC)」における、ピアサポートワーカーの養成を含めた共同創造、組織改革への取り組みと、当センターの活動への展開について発表致しました。障害のある医学部学生の支援について、フロアからご質問・ご意見をいただくなど、他大学等でも、その支援の充実化についての関心の高まりが窺えました。

第 55 回日本医学教育学会大会(2023 年 7 月 28-29 日、長崎)

2023 年 7 月 28-29 日に長崎にて開催された第 55 回日本医学教育学会大会のシンポジウム「医学におけるダイバーシティとインクルージョン教育」(オンライン)において、「医学部におけるダイバーシティ・インクルージョン教育」というタイトルで、主に当センターで取り組んでいる、「医学のダイバーシティ&インクルージョン人材育成プログラム」について紹介しました。順天堂大学医学部・医学教育研究室の武田裕子先生から「医学教育における実践的 SDH 教育」、東京大学先端科学技術研究センターの熊谷晋一郎先生から「医学・医療における共同創造に向けた組織変革」、国立精神・神経医療研究センターの山口創生先生から「医学生のアнтиスティグマ」というテーマでご講演いただき、日本の医学・医療における D&I の推進に向けて、医学教育という観点から議論を交わすことができました。

■ 実践部門

障害のある構成員を対象としたインタビュー動画プラットフォームの構築と事例集・ガイドラインの作成

医療・医学領域では、障害や合理的配慮に関する知識やトレーニングが不足していること、障害のある者が適切に配慮を受けるためのアクセス方法が定まっていないこと、組織において明確なポリシーや対応方法が存在しないこと、専門職の資格取得に際しての要件であるテクニカルスタンダードが明確に示されていないこと、といった構造的なバリアに加えて、障害についての固定観念・スティグマの存在、医学モデルによる障害の捉え方といった文化・風土的なバリアが特に大きいと言われていています (Meeks, Jain, 2018)。

このため、障害のある構成員にとって、他の構成員と同等のレベルで診療・教育・研究や学業に従事することが困難であり、障害のある者が医学領域に進学し活躍する機会は極めて少なく (Meeks et al., JAMA, 2019)、本邦においては欧米と比較してもさらに限定的な状況にあります。こうした状況は、差別解消法や雇用促進法の下、障害のある構成員に対する合理的配慮の提供が求められる医療・医学領域の組織にとって、大きな課題があるといわざるを得ません。

本プロジェクトでは、障害をもち医療・医学領域の組織において就労する医療従事者、医学研究者・教育者、あるいは同領域へ進学した学生等の構成員に対するインタビュー動画プラットフォームを構築すべく、東京大学先端科学技術研究センター等とともに作成に向けた委員会を組織し、準備を進めました。当事者の経験を知識化し、また、データの質的研究を行うことで、インクルーシブな構造・文化に裏打ちされた組織・環境を構築するための諸要因を抽出し、事例集やガイドラインを作成することを目指します。これにより、障害をもち医療・医学領域の組織において就労する医療従事者、医学研究者・教育者、あるいは同領域へ進学した学生等の構成員への支援方法の開発、政策立案へのエビデンス提供に寄与したいと考えています。

2023 年度は、障害のある科学者や医療者が自身の経験を語っているインタビュー動画を掲載するウェブサイト「Disabled inSTEMM」(<https://www.d-stemm.jp/about/>)を立ち上げました。

【業績一覧】

(笠井清登(センター長)、里村嘉弘(副センター長)、宮本有紀(室員・精神看護学分野)、金原明子(室員・附属病院精神神経科))

英文原著

Morishima R, Kanehara A, Aizawa T, Okada N, Usui K, Noguchi H, Kasai K: Long-term trends and socio-demographic inequalities of emotional/behavioral problems and poor help-seeking in adolescents during the COVID-19. *J Adolesc Health*. 2024 Mar;74(3):537-544. DOI: 10.1016/j.jadohealth.2023.09.015. Epub 2023 Nov 15.

DeVylder J, Yamaguchi S, Hosozawa M, Yamasak S, Ando S, Usami S, Kanata S, Hiraiwa-Hasegawa M, Kasai K, Nishida A: Adolescent psychotic experiences before and during the COVID-19 pandemic: a prospective cohort study. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*. 13 November 2023. <https://doi.org/10.1111/jcpp.13907>

Hosozawa M, Ando S, Yamaguchi S, Yamasaki S, DeVlyder J, Miyashita M, Endo K, Stanyon D, Knowles G, Nakanishi M, Usami S, Iso H, Furukawa TA, Hiraiwa-Hasegawa M, Kasai K, Nishida A. Sex differences in adolescent depression trajectory before and into the second year of COVID-19 pandemic. *J Am Acad Child Adolesc Psychiatry*. 2023 Oct 5:S0890-8567(23)02127-5. doi: 10.1016/j.jaac.2023.08.016. Online ahead of print. PMID: 37805069

Narita Z, DeVlyder J, Yamasaki S, Ando S, Endo K, Miyashita M, Yamaguchi S, Usami S, Stanyon D, Knowles G, Hiraiwa-Hasegawa M, Furukawa TA, Kasai K, Nishida A. Uncovering associations between gender nonconformity, psychosocial factors, and mental health in adolescents: a birth cohort study. *Psychol Med*. 2023 Sep 18:1-10. doi: 10.1017/S0033291723002623. Online ahead of print. PMID: 37721216

Yamaguchi S, Ando S, Miyashita M, Usami S, Yamasaki S, Endo K, DeVlyder J, Stanyon D, Baba K, Nakajima N, Niimura J, Nakanishi M, Hiraiwa-Hasegawa M, Kasai K, Nishida A. Longitudinal relationships between help-seeking intentions and depressive symptoms in adolescents. *J Adolesc Health*. 2023 Sep 4:S1054-139X(23)00347-6. <https://doi.org/10.1016/j.jadohealth.2023.06.033>

Tanaka M, Kanehara A, Morishima R, Kumakura Y, Okouchi N, Nakajima N, Hamada J, Ogawa T, Tamune H, Nakahara M, Jinde S, Kano Y, Kasai K: Educational challenges for 22q11.2 deletion syndrome in Japan: Findings from a mixed methods survey. *Journal of Applied Research in Intellectual Disabilities*. 36: 558-570, 2023. May 2023. <https://doi.org/10.1111/jar.13079>

Hosozawa M, Yamasaki S, Ando S, Endo K, Morimoto Y, Kanata S, Fujikawa S, Cable N, Iso H, Hiraiwa-Hasegawa M, Kasai K, Nishida A: Lower help-seeking intentions mediate subsequent depressive symptoms among adolescents with high autistic traits: a population-based cohort study. *Eur Child Adolesc Psychiatry*. 2023 Apr;32(4):621-630. <https://doi.org/10.1007/s00787-021-01895-3> PMID: 34694472.

Iida M, Sakuraya A, Watanabe K, Imamura K, Sawada U, Akiyama H, Komase Y, Miyamoto Y, Kawakami N. The association between team job crafting and work engagement among nurses: a prospective cohort study. *BMC Psychol*. 2024 Feb 9;12(1):66. doi: 10.1186/s40359-024-01538-7. PMID: 38336755; PMCID: PMC10854162.

Funakoshi A, Miyamoto Y, Tsuchiya T, Tsunoda A. A. Development of the clinical competency assessment scale in child and adolescent mental health nursing. *Journal of Psychiatric and Mental Health Nursing*. 2023;00:1-13. doi: <https://doi.org/10.1111/jpm.13014>.

Hayes D, Hunter-Brown H, Camacho E, McPhilbin M, Elliott RA, Ronaldson A, Bakolis I, Repper J, Meddings S, Stergiopoulos V, Brophy L, Miyamoto Y, Castelein S, Klevan TG, Elton D, Grant-Rowles J, Kotera Y, Henderson C, Slade M, De Ruyscher C, Okoliyski M, Kubinová P, Eplov LF, Toernes C, Narusson D, Tinland A, Puschner B, Hiltensperger R, Lucchi F, Borg M, Tan RBM, Sornchai C, Tiengtom K, Farkas M, Morland-Jones H, Butler A, Mpango R, Tse S, Kondor Z, Ryan M, Zuaboni G, Hanlon C, Harcla C, Vanderplasschen W, Arbour S, Silverstone D, Bejerholm U, Powell CL, Ochoa S, Garcia-Franco M, Tolonen J, Dunnett D, Yeo C, Stepanian K, Jebara T. Organisational and student characteristics, fidelity, funding models, and unit costs of recovery colleges in 28 countries: a cross-sectional survey. *The Lancet Psychiatry*. 2023;10(10):768-79. [https://doi.org/10.1016/S2215-0366\(23\)00229-8](https://doi.org/10.1016/S2215-0366(23)00229-8)

Nakanishi M, Nakashima T, Miyamoto Y, Sakai M, Yoshii H, Yamasaki S, Nishida A. Association between advance care planning and depressive symptoms among community-dwelling people with dementia: An observational cross-sectional study during the COVID-19 pandemic in Japan. *Front Public Health*. 2023 Mar 30;11:915387. doi: 10.3389/fpubh.2023.915387. PMID: 37064697; PMCID: PMC10098156.

Asaoka H, Sasaki N, Koido Y, Kawashima Y, Ikeda M, Miyamoto Y, Nishi D. Reliability and validity of the Japanese version of the Professional Fulfillment Index among healthcare professionals: A validation study. *Journal of Occupational Health*. 2023;65(1):e12422. doi: <https://doi.org/10.1002/1348-9585.12422>.

Kanamori Y, Miyamoto Y, Sawada U, Iida M, Tabuchi T, Nishi D. Association between adverse childhood experience and unintended pregnancy among Japanese women: a large-scale cross-sectional study. *Journal of Psychosomatic Obstetrics & Gynecology*. 2023;44(1). doi: 10.1080/0167482x.2023.2274295.

Dohi Y, Imamura K, Sasaki N, Komase Y, Sakuraya A, Nakamura Y, Maejima M, Aoyama M, Kawakami N, Miyamoto Y. Effects of an internet-delivered behavioral activation program on improving work engagement among Japanese workers: A pre-and post-test study. *J Occup Environ Med*. 2023 Oct 1;65(10):e654-e659. doi: 10.1097/JOM.0000000000002933. Epub 2023 Jul 29. PMID: 37505082.

Asaoka H, Koido Y, Kawashima Y, Ikeda M, Miyamoto Y, Nishi D. Association Between Attitudes Toward Trauma Informed Care and Psychological First-Aid Training Experience Among Health Care Professionals in Japan. *Disaster Med Public Health Prep*. 2023;17:e443. <https://doi.org/10.1017/dmp.2023.103>

Kataoka M, Kotake R, Asaoka H, Miyamoto Y, Nishi D. Research note reliability and validity of Japanese version of the trauma-informed care provider survey (TIC provider survey). *BMC Res Notes*. 2023;16(1):68. <https://doi.org/10.1186/s13104-023-06337-8>

Iiyama S, Izutsu T, Miyamoto Y, Benavidez JRM, Tsutsumi A. Effectiveness of Psychological First Aid e-Orientation among the General Population in Muntinlupa, the Philippines. *International Journal of Environmental Research and Public Health*. 2023;20(2):983. doi: 10.3390/ijerph20020983.

英文総説

和文原著

江口 聡, 里村 嘉弘, 山崎 修道, 市川 絵梨子, 夏堀 龍暢, 管 心, 清水 希実子, 石橋 綾, 矢島 明佳, 東山 美恵, 株元 麻美, 竹下 保稔, 金原 明子, 神出 誠一郎, 笠井 清登. 統合失調症患者を対象としたメタ認知トレーニング効果の予備的検討. 精神科治療学(0912-1862)38 巻 12 号 Page1463-1470(2023.12)

大石 志穂, 塚野 和代, 阿部 麻里, 川上 慎太郎, 松川 美穂, 齋藤 朗, 里村 嘉弘, 笠井 清登.

大学病院における休職者の実態と再休職要因の探索 産業医面談記録を用いた後ろ向き観察研究. 産業精神保健(1340-2862)31 巻増刊 Page S136(2023.08)

森島遼、山名隼人、神出誠一郎、熊倉陽介、金原明子、田中美歩、城大祐、道端伸明、笠井清登: 22q11.2 欠失症候群における身体疾患・神経疾患・知的障害の多疾患罹患と生活の質の関連の検証—指定難病患者データベースを用いた横断解析—. 医療と社会 33(3): 437-446. 2023.

宇野晃人, 田中美歩, 高橋優輔, 澤井大和, 熊倉陽介, 森島遼, 中島直美, 金原明子, 濱田純子, 小川知子, 田宗秀隆, 柳下祥, 池亀天平, 榊原英輔, 金生由紀子, 神出誠一郎, 笠井清登: 22q11.2 欠失症候群のある人と家族が抱える福祉制度に関する困難とニーズ—混合研究法によるアンケート回答解析— 精神神経学雑誌 125: 486-497, 2023

<https://doi.org/10.57369/pnj.23-069>

大河内範子、熊倉陽介、濱田純子、田中美歩、中島直美、森島遼、中原睦美、笠井清登: 重複障害を抱える染色体起因性疾患児の母親が学校教育において体験する困難. 心理臨床学研究(0289-1921)40 巻 6 号 Page533-539(2023.02). 2023.

臼井香、長谷川智恵、市橋香代、森田健太郎、金生由紀子、金原明子、大路友惇、里村嘉弘、山口創生、笠井清登、多田真理子: 精神的不調を抱える AYA 世代に対するリカバリー志向型早期支援プログラムの開発. ブリーフサイコセラピー研究 31(2): 37-48, 2023.

https://doi.org/10.20748/jabp.31.2_37

川口敬之, 阿部真貴子, 山口創生, 五十嵐百花, 小川亮, 塩澤拓亮, 安間尚徳, 佐藤さやか, 宮本有紀, 藤井千代. 地域精神保健福祉研究における患者・市民参画の研究段階および研究テーマに関する見解: 複数の立場の視点に基づく質的内容分析. 医療と社会. 2023; 33(2):257-270. <https://doi.org/10.4091/iken.2023.001>

五十嵐百花, 宮本有紀, 渡辺慶一郎. 学生がメンタルヘルス支援を受ける中で経験した困難と助かったこと —利用者視点の探索的研究—. 大学のメンタルヘルス. 2023; 5:92-100.

和文総説

熊倉陽介、高橋優輔、澤井大和、宇野晃人、神出誠一郎、笠井清登: 22q11.2 欠失症候群メンタルヘルス専門外来—複合的困難の声を聴く—. 精神科治療学 38(8): 879-885, 2023

笠井清登: だいじょうぶな社会に向けて: 予防精神医学の回復. 予防精神医学 2023(1).8Vol: 2-9, 2023.

笠井清登: 人生行動科学としての思春期学. 思春期学 41: 34-38, 2023.

和文報告書(座談会記録を含む)

笠井清登、宇田川健: 新春対談: ほんわかといいい感じに変えていきたい. こころの元気+. 2024年1月号 p4-5

和文記事

宮本有紀. こころの病気とスティグマ 共同創造で作られるスティグマ講座 リカバリーカレッジの取り組み. こころの科学. 2023; 228: 103-5.

宮本有紀. 第3章 病院から社会への移行を整える看護 ③ストレングス、エンパワメント、レジリエンスを引き出すかかわり. 水野 恵理子・上野 恭子編. 看護学生のための精神看護技術. 東京: サイオ出版; 2023. p142-152

書籍

笠井清登: 心理支援をどうモデル化するか: 自分の支援を言葉にして問い続ける. 臨床心理学スタンダードテキスト、金剛出版、2023, pp.151-164.

学会発表・講演等

笠井清登: 医療研究開発に求められる患者・市民参画(PPI)及びダイバーシティ&インクルージョン. 日本医療研究開発機構(AMED)医療研究開発業務研修、東京、2023年12月18日. 研修講師

天田由紀子・高田晴江・石田貴紀・石村徹・金原明子「分科会3 なりたてピアスタッフの純真な気持ちを語る」第11回全国ピアスタッフの集い(2023年12月)

清田智也・長嶋美紀・里村嘉弘・斎藤俊生・林友里「分科会2 ピアスタッフと専門職 ～「協働」ってなんだろう?～」第11回全国ピアスタッフの集い(2023年12月)

里村嘉弘、金原明子、宮本有紀、大島紀人、熊谷晋一郎、佐々木理恵、宇野晃人、熊倉陽介、柳下祥、笠井清登. 医学領域のダイバーシティとインクルージョンに向けて—医学のダイバーシティ教育研究センターの取り組み—. シンポジウム 課題解決型高度医療人材養成(精神領域)のこれから—産業保健との関連から—. 第119回日本精神神経学会学術総会(2023年6月)

宮本有紀、小竹 理紗、新村 朋子、常本[倉田] 真奈美、澤田 宇多子、大津 絵美子、西 大輔.
精神科入院経験者との協働(患者市民参画)による精神科入院ケア認識尺度(Views on Inpatient
Care:VOICE)日本語版の開発. 第 33 回 日本精神保健看護学会学術集会 (2023 年 5 月)

Yuki Miyamoto, Emi Matsumoto, Makoto Ogawa, Yasuko Morita, Rie Chiba, Yousuke Kumakura.
Participants' Impressions of Japanese Recovery Colleges: A Qualitative Study. Refocus on
Recovery 2023, Nottingham, UK, 2023/9/6-7

Yoshiaki Kanamori, Hinano Yumura, Taiga Hayashi, Makiko Nobori, Akiko Inoshima, Yuka Konishi,
Utako Sawada, Mako Iida, Yuki Miyamoto Gender differentiated information sources, knowledge
and attitude of sex education: A scoping review. The 27th East Asian Forum of Nursing Scholars.
Hong Kong, China, 2024/3/6-7

Taiga Hayashi, Utako Sawada, Yuki Miyamoto. Exploring the subjective experiences in daily life
of individuals with mental health difficulties using experience sampling method: Qualitative
content analysis. The 27th East Asian Forum of Nursing Scholars. Hong Kong, China, 2024/3/6-7

Makiko Nobori, Taiga Hayashi, Hinano Yumura, Yoshiaki Kanamori, Akiko Inoshima, Yuka Konishi,
Utako Sawada, Yuki Miyamoto. Narratives of People with Illnesses and Disabilities in Japan: A
Scoping Review. The 27th East Asian Forum of Nursing Scholars Hong Kong, China, 2024/3/6-7